

## P1

### アメリカ手話における時の表現の標識としての「うなずき」動作

マーガレット・ルース・クラブトリー、ロニー・B・ウィルバー  
(パデュー大学 [アメリカ])

#### 要旨

アメリカ手話では、手以外（顔、頭部、体幹）の動作を用いて文法機能を標示することがあるが、このうち頭部のうなずき動作は、談話中で極めて頻繁に用いられるにも関わらず、これまでの研究ではあまり注目されてこなかった。過去の研究では、うなずき動作の機能として、省略された動詞の位置の標示 (Liddell 1980:30) や強い断言 (Liddell 1980:31) が挙げられている。本発表では、これらに加えて、うなずき動作が時の表現を標示する機能を持っていることを報告する。さらに、うなずき動作が時の表現の標示という統語論的機能を果たしている場合には、そのスコープが横並びではなく階層をなすことが原因で、相当な程度の異形態が生じることを主張する。

我々の観察によると、うなずき動作では 4 つの異なる「深さ」が区別される。これを浅いほうから順に n1 から n4 と呼ぶことにする。最も浅い n1 では、頭部がわずかに後ろに引かれる。n2 ではかなり強くあごを引くため、二重あごが見られる。n3 では典型的なうなずき動作が行われ、頭部が前方に傾けられる。最後に n4 では、頭部が肩のほうに強く寄せられる。

うなずき動作は、文の中心となる動詞が表している出来事が生じた時点を指し示す語句に重なるように行われる。時点を指し示す語句は、「冬」のように単語一つの場合もあり、「三回・毎週」のような句である場合もある (例 1)。時の表現に隣接する他の手話単語がうなずき動作中に生じることもあるが、時の表現は必ずこのうなずき動作でカバーされている。

異形態の使い分けについては、n2～n4 は必ず他のうなずき動作に後続するか同時に発せられる。すなわち、n2～n4 が発せられる発話中には、必ず n1 が先行している。埋め込まれた n2 については、先行する n1 のない例もいくらか見られた。このことから、n2～n3 が現れるのは非手指動作が重なることが条件であると考えられる。あたかも複数の統語的節点がそれぞれひとつずつうなずき動作を生成し、それが下位のものを上書きするのではなく下位のものの上に重なってうなずきの強さを高めるが如くである。これは、Chung (2009) が述べる非手指動作の「統語的積み重ね」の概念に似たものである。異形態 n2～n3 は、うなずき動作の共起によって生じる音声学的な結果なのである。



図 1: n2



図 2: n4

データの中には、動詞をカバーする形で発せられるうなずき動作もあり、それらも時の表現をカバーするうなずき動作をさらに深めることができる。最も顕著に連続してうなずき動作が現れる例は、「[ 一年間、[ 一週間に [ 三回 ] ] ]」などといった複雑な時の表現であった。例1の語釈を見ると、発話が進むにつれてうなずき動作が深くなっていくのが見て取れる。

この分析から、非手指動作の実現形式にはかなり幅広いバリエーションを受け入れるべきであると分かる。時の表現をカバーするうなずき動作は、その異形態の振る舞いが予測可能であることから、アメリカ手話の分析に対して将来性ある貢献をもたらし、アメリカ手話の非手指動作に対して新たな方向から光を当てるものである。

(1) 「彼は一年間、週に三度教会に通い続けた」 (英語での入力)

	<u>        </u>					
	<u>        </u>					
指差し-3	行く-過去	一年	行く+++	教会	三度	毎週
指差し-3	[ 行く-過去	[ 一年	[ 行く+++	教会	[ 三度	毎週 ] ] ] ]
3人称単数	行った	一年	行く-反復	教会	三度	毎週

「過去には、彼は一年間、週に三度、毎週教会に行っていた」

### 参考文献

Churug, S. 2009. Syntax and Prosody in American Sign Language: The Nonmanual Prosodic Consequences of Multiple wh-questions (M.A. thesis, University of Washington).

Liddell, S. 1980. *American Sign Language Syntax*. The Hague: Mouton.